

## 「政治の時代」へのいざない

- 国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書マイクロ版集成「政治」 -

北 原 聡

### 1. 国会図書館と明治期刊行図書

国立国会図書館法の成立にともない、昭和23年に設立された国会図書館が、我が国唯一の国立図書館として、戦後日本の知識の普及と学術の発展に貢献してきたことはいうまでもなく、こうした活動の基盤となったのが、納本制度などにより国内外から収集された膨大な所蔵図書である。国会図書館の蔵書は、和漢書512万冊、洋書215万冊、計727万冊におよび、国内最大規模を誇るが、そのすべてが戦後に蓄積されたのではなく、収書の歴史は戦前にまでさかのぼる。国会図書館は、帝国議会の衆議院・貴族院の図書館、および戦前における国立図書館である帝国図書館を前身としており、これらの図書館においても、納本制度にもとづく図書の収集が継続的に行われてきたのである。国立国会図書館が二つの起源をもつことは、同館が、国会のための図書館という機能と、国立の図書館としての役割を併せ持つことを示している。

帝国議会附属の図書館は、明治23年の議会開設とともに、衆議院と貴族院にそれぞれ設置された。そして、昭和23年の国立国会図書館発足にともない廃止され、和書13万冊、洋書4万冊の所蔵図書は国会図書館に移管された。いっぽう、帝国図書館は、明治8年に開設された文部省所管の東京書籍館を起源とする。東京書籍館は明治10年東京府へ移管され、東京府書籍館と改称されたが、明治13年再び文部省所管となり、名称を東京図書館とあらためた。東京図書館は、明治30年の国立図書館官制により国立の帝国図書館へ発展し、昭和22年の国立図書館への改称を経て、昭和24年国会図書館に統合された。統合時の蔵書数は、和漢書92万冊、洋書15万冊にのぼった。

このように、明治初期に始まる国会図書館の前身は、戦後の同館発展の基盤となり、700万冊を超える現在の蔵書も、戦前の蓄積の上に形成されたといえよう。したがって、戦前期に収集された図書は、国会図書館の蔵書においてとくに重要な位置をしめ

ており、そのなかでも、とりわけ学術的、歴史的に高い価値を有するのが、明治期に刊行された図書である。国会図書館が所蔵する明治期刊行図書は、11万点、16万冊をかぞえ、明治期に刊行された全図書の70パーセントに相当する。その内容は、人文科学、社会科学、自然科学、理工・医科学と多岐にわたり、各分野の歴史研究にとって不可欠の資料となっている。しかし、これらの図書の多くは、刊行から長い年月を経たことにより劣化が進み、文化遺産の後世への伝達という点からも、その保存が喫緊の課題となった。そこで打ち出された対策が、マイクロフィルム化事業であり、マイクロ化されたことにより、国会図書館へ足を運ぶことなく明治期刊行図書が利用可能となり、資料収集の利便性は、国内はもとより海外の研究者にまでおよんだ。

「明治期刊行図書マイクロ版集成」は28の部門に分かれ、歴史、伝記、哲学、宗教、地理・風俗、経済産業、社会、法律、統計、政治、体育・武道、教育、農学、工学、自然科学、兵事、医学、家事、芸術・諸芸、総記、語学、文学、児童図書、欧文図書／人文諸科学、欧文図書／語学、欧文図書／文学・芸術、欧文図書／社会諸科学、および欧文図書／自然諸科学・医学・工学から構成される。このうち、本学図書館には「政治」のほか、歴史(4,129点、10,131冊)、伝記(4,113点、6,009冊)、哲学(5,970点、8,801冊)、宗教(8,436点、12,974冊)、地理・風俗(5,973点、8,046冊)、経済産業(5,803点、8,393冊)、教育(5,048点、7,104冊)、および欧文図書／社会諸科学(社会・経済産業・統計)(191点)が所蔵されている。

### 2. 「政治」部門図書の内容

明治期刊行図書マイクロ版集成の「政治」部門は、2,228点、3,273冊、401リールからなり、政治および政治に関連する分野の図書が収められている。その内訳は、政治(762点、886冊、77リール)、議会・政党・選挙(363点、605冊、90リール)、行政

(90点、119冊、16リール) 地方行政(245点、274冊、29リール) 地方議会(104点、311冊、45リール) 警察・消防(163点、368冊、57リール) 外交・国際問題(210点、226冊、22リール) 補遺(120点、139冊、13リール) および補遺2(171点、345冊、52リール)である。新国家の建設が国民的課題となった明治時代は、国のあり方をめぐって、政治に大きな関心が寄せられた「政治の時代」であり、本資料は、明治という時代を理解するうえで、好個の材料といえよう。そこで、こうした中からいくつかの著作を取り上げ、明治期の政治と関連させつつ、本資料を紹介していこう。

明治期を通じて最大の政治的争点になったのは、議会に関する問題であり、明治前期には、国会の開設を目的とした自由民権運動が高揚し、全国各地で演説会がひらかれた。自己の主張を公衆の面前で発表する演説は、明治になって取り入れられた表現方法で、演説会では、政党の領袖から民権運動の壮士に至るまで弁を振るった。演説の内容は演説集や演説筆記として出版され、本資料には、『愛国民権演説家百詠選』(明治15年)など多数が収められている。自由民権運動を代表する政治家板垣退助が暴漢に襲われたのも遊説の最中であり、「板垣死すとも自由は死せず」という名言をはいた場面は、『自由党史』(明治43年)に詳しい。ただ、その後の板垣は、自身の洋行問題などにより周囲の期待を裏切り、民権運動は一部で過激化しつつ退潮に向かい、帝国議会は政府の主導で明治23年に開設された。

こうしたなか、民権運動の理論的指導者中江兆民は、『三酔人経綸問答』(明治20年)を著した。同書において、穏健的進歩主義をとる南海先生は、日本の対外的膨張を主張する国権主義者の豪傑君と、民権発達の必要を訴える理想主義者の洋学紳士に対して、漸進主義の重要性を説いた。豪傑君の主張につながるものとしては、「変節」後の徳富蘇峰が上梓した『大日本膨張論』(明治27年)があげられ、洋学紳士の議論は、兆民の愛弟子であった幸徳秋水の無政府主義に受け継がれたといえよう。

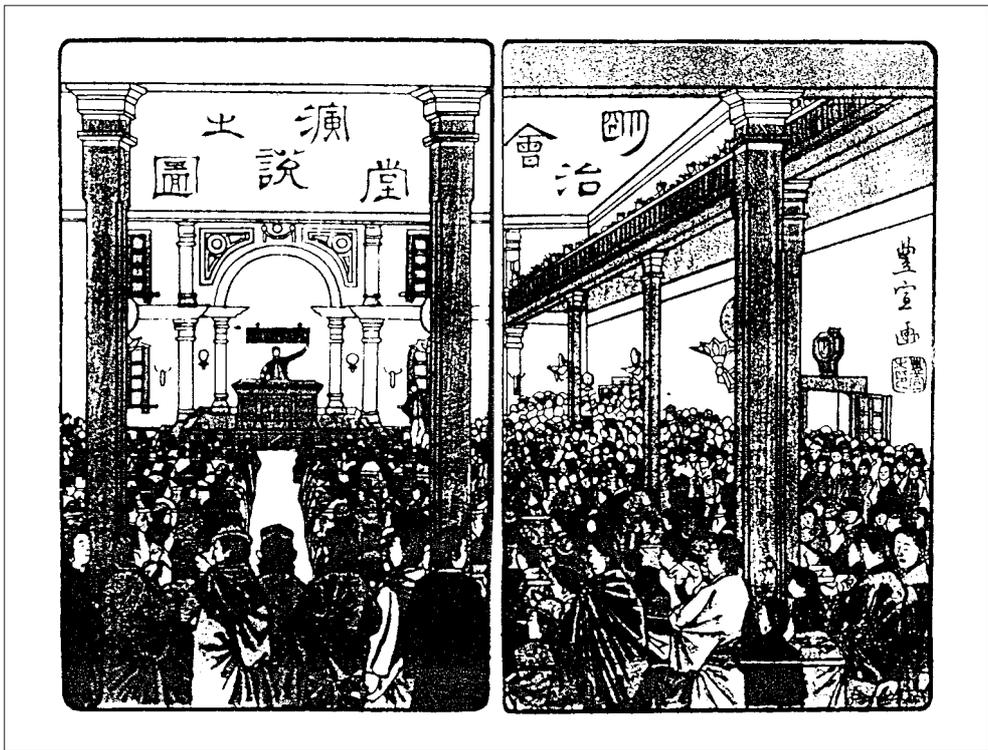
議会開設後、民党は超然主義をとる藩閥政府と激しく対立した。超然主義とは、政府が政党に与せず、

政党の外に立って政治を行うことを意味する。議会、政党に対する行政府の優越性を強調したことで知られる藩閥官僚都築馨六は、その著書『民政論』(明治25年)において、自由、改進黨を批判し、民権の拡大に異議を唱え、日本初の社会学者外山正一は、『藩閥之将来』(明治32年)を著し、藩閥再生産に果たす教育の役割の重要性を指摘した。いっぽう、藩閥による政治の独占に反対し、立憲政治の国民的基盤を拡大する必要性を力説したのが、ジャーナリスト・史論家の竹越与三郎著『人民読本』(明治34年)である。竹越は西園寺公望の側近で、西園寺は明治31年、第3次伊藤博文内閣の文部大臣として教育勅語のリベラルな改変を試み、失敗した経験をもつ。その西園寺が同書の巻頭に寄せた題字は、『論語』泰伯篇の、「民可使由之、不可使知之」(民は之れによらしむべし。之れを知らしむべからず。)の知と由を入れ替えた、「可使知之、不可使由之」(之を知らしむべし。之によらしむべからず。)という言葉であり、そこには、国民の政治意識を高めることで藩閥政府に対抗し、リベラルな政治を実現しようという意気込みが感じ取れよう。この後、政府と民党は対立から提携へと関係を変化させ、明治後期にかけて政党政治の基盤が徐々に形成された。

以上、明治期刊行図書「政治」部門からいくつかの著作を紹介したが、それは本資料のごく一部に過ぎず、そこに収められた数々の書物に、幅広い分野における研究のヒントが隠されていることはいうまでもなからう。また、こうした著作物のなかには、文庫や全集等に収載され、現在でも入手可能なものも多いが、明治という時代の息遣いを感じ取るためには、原本にあたるのが不可欠の作業であり、その意味からも、本資料は大きな価値を有しているといえよう。(次頁以降に文中で紹介した資料の一部を掲載)

#### 参考文献

- 国立国会図書館編『国立国会図書館30年史』(同館、1979年)  
 国立国会図書館支部上野図書館編『上野図書館八十年略史』  
 (同館、1953年)



『愛国民権演説家百詠選』より 明治の演説風景

自由黨史上巻 五九二

も陛下の御心を成し、人民の望を遂げ、君民共に其休光を獲れ、國家と共に其幸慶に頼らんことを希ふものは、誰れか又かの兩力其平均を保ち、權衡を失はざる所の完美なる立憲制度を制定するに勉めざらん哉。諸君も亦之れを政府に一任せず、必ず自ら之れを勉め、之れを期することを信するなり。

是日板垣は微恙あり、勉めて中政院の懇親會に臨み、しも其演説殆んど二時間の長きに亘り、心身俱に疲れ、爲めに坐に耐へず、而かも會衆の感興を妨げんことを恐れて、隨從者を止め、堅く黨員の禮送を謝し、會のいまだ散せざるに先ち獨り辭して旅館に就く。時に午後六時、天地蒼蒼然、夕陽將に西に沈まんとする頃なり。き、板垣を穿つて起ち、傍に立てる接待員と覺し、四五の人々に一禮し行くこと二三歩、忽ち一肚腹あり、其人々の中より現はれ、國賊と呼びつゝ、右方の横合より躍り來つて、短刀を閃かして板垣の胸間を刺す。板垣は是時赤手、單身、洋杖すらも携へず、賊を見て大喝叱して曰く、嗚呼する乎と、賊を以て強く敵の心腹を撃ちしも、餘りに力を入れし爲め、下りて腹部に當る。敵は躊躇として飛び退き、更に身を轉回して正面より突撃し來る。飛及電掣、遂に極りなし、板垣敵の手首を握せんとして、誤つて拳を握る。此時及尖板垣の左側の胸間に觸る、板垣身を轉じて

之を防ぎ、敵其目的を達せざるを知り、逆振して刀を引き、板垣の右手爲に刺傷を蒙り、深き殆ど骨に達す。板垣更に左手を之に添へ、相争ふ。内藤魯一、勇奔し來り、直に凶漢の領を攫んで何する乎と言ひ、仰向に之を倒す。此時白及敵の手を離るゝと同時に、亦板垣の手を離れ、空を飛んで東北數歩の處に墜つ。板垣刺客を睥睨し、叫んで曰く、板垣死すとも自由は死せずと。神醫の一語、滿腔の熱血と共に、送り出で千秋萬古に亘て、深淵たり。竹内綱、板垣の右手を見て、鮮血の淋漓たるに、驚く。板垣曰く、手は開はぬ、たゞ胸を二個處やられた故、生命は駄目なりと。小室信夫、傍にあり、聲音に變りなし、呼吸は如何と問ふ。板垣乃ち自ら思へらく、聲音に變りなく、呼吸も亦苦しからず、或は同生の望なきに非ずと、竹内創傷を見んと乞ひ、控鈕を脱し、短衣を排し、胸部を檢するに、果して二創あり、重しと雖も、意外に深からず。竹内曰く、關はぬ、關はぬ、是に於て板垣は自ら生くるの覺悟を爲すべしと決し、之より先き、久しく氣管枝加答兒を病み、爲に貧血を來せるを以て、先づ吐血を遏めんが爲め、宮地茂春をして手拭を持ち來りて、右手の首を緊握せしめ、次に又た手拭を捲きて、胸間二個處の創面に當て、兵子帯を以て緊しく之を縛帶しながら、竹内に躍て曰く、予自らは少しも變らずと思へども、足下の見る所の予

五九三

『自由党史』より 板垣退助遭難の場面

